

# 淡谷 悠蔵（あわや・ゆうぞう）

## 1、プロフィール

歌人。小説家。評論家。若山牧水の影響で短歌誌「黎明」を創刊。地方文学運動、農民運動を基底とした、小説、評論、戯曲を県内の新聞、雑誌に発表、県文壇をリードした。

<生没>

1897(明治 30)年3月 22 日 ~ 1995(平成7)年8月8日

<代表作>

歌集『焦心』

評論「郷土芸術論」(「黎明」連載)

小説『野の記録』

<青森との関わり>

青森町寺町(現青森市)生まれ。新城に帰農、農民運動を興す。昭和 47 年第 14 回県文化賞を受賞。

## 2、作家解説

明治 30 年青森町寺町(現青森市)に、父金蔵、母まつの5男として誕生。36 年新町尋常小学校入学。40 年浦町高等小学校入学。

大正7年商業を嫌悪して家出、五所川原から連れ戻されるが、百姓への転換が実現。小品「山に住んで」が「文章世界」に入賞(選者加能作次郎)。

8年7月五所川原の「独白」、青森の「樹焰」、鱒ヶ沢の「素描」など三短歌誌を合同し黎明詩社を結成、歌誌「黎明」を創刊。9年の同誌9月号から「郷土芸術論」を6回連載。地方の生活に根ざした主体的芸術を要望する気魄の一篇だった。同誌の短篇「カールの死」「手を拱く」(昭和3年)、黒石の同人誌「胎盤」での「ソローミン考」(大正 11 年)を発表、力倆を示した。また東奥日報紙上における「芸術の社

会化の是非」をめぐる吉田義隆との論争(11年)。これら創作、評論は<歌への別れ>を告げるものだった。

「黎明」は昭和3年10月10周年記念号を出し、後十数冊で廃刊するが、体裁上でも短歌から評論・小説に重点が移り、トルストイ色は薄れ、プロレタリア文学待望論が現われ始める。同誌は淡谷と武者小路実篤、賀川豊彦、芥川龍之介、秋田雨雀、鳴海要吉への接点となった。

5年創刊の「座標」は県下総合誌とし不偏不党を宣したが、時代を反映し左右に分離する傾向の中で、淡谷は評論のほかプロ文学「解氷期」で旗幟鮮明、逆の側に太宰治(大藤熊太)がいた。同誌は時代の激動の波に吞まれる結果となった。

自伝小説『野の記録』は17年に書きはじめ、6～11年の間を描く(7部まで)。冒頭の昭和6年の凶作では救済運動、以後中国各地への進出を含んで広域に及ぶ(26年の「薊」(「東奥日報」連載)も素材的には一部重なる)。戦中の思想犯容疑入獄、保護観察処分の具体的描写は歴史的に見ても貴重である。33年この作の出版の際、「新しき村」の青森支部の縁で、武者小路実篤が序文を書いた。

### 3、資料紹介

#### ○『野の記録』

図書

1976(昭和51)年2月10日

195mm×133mm

全7巻。7部、72章の大河小説。武者小路実篤の「序」がある第1部は昭和33年に刊行されたが、著作集出版にあたり、初めの3部構成が7部構成に膨らむ。昭和初期から、戦火の中国大陸、太平洋戦争敗戦まで、激動の10年代が背景。自伝的なライフワーク。